

明治大学教養論集 通巻427号
(2008・1) pp. 57-68

論文「倫理学」(1960)におけるヘアーの 〈道徳〉概念規定について*

柴 崎 文 一

ヘアー (R. M. Hare) は、1960 年に刊行されたアームソン (J. O. Urmson) 編集による哲学事典 *Encyclopedia of Western Philosophy and Philosophers* において、「倫理学」ethics の項目を担当執筆している。この事典は、哲学的諸問題及び古典的哲学者に関し、当代の研究者による小論文をもって解説を与えるという方針の下に編集されたもので、各項目の解説は、一般の事典に見受けられるものとは異なり、執筆担当者自身の見解が色濃く反映された叙述となっている。ヘアーの担当した項目についても、それ故、「倫理学」に関する彼独自の見解を述べることが主眼となっており、またその中には、〈道徳〉morals という概念自体に関する直接的な言表も見受けられるところから、本稿では、この時期における彼の〈道徳〉概念規定を明らかにするために、本論文の内容を検討する¹⁾。

「倫理学」の項目を解説するにあたり、ヘアーはまず以下のように、「倫理学」の係わる三つの問題領域を区分することから始めている。

1. 道徳問題 moral questions の領域。
2. 人々の道徳的見解 moral opinions についての事実に関する問題 questions of fact の領域。
3. (べし ought, 正しい right, よい good, 義務 duty 等の) 道徳語の意味に関する問題 questions about the meanings of moral words, な

いしこれらの語に係わる概念又は事象の本性に関する問題 questions about the nature of the concepts or the things の領域。(EMC, p. 39)

第一の領域では、「私はそれをなすべきか？」Ought I to do that? 「重婚は悪いことか？」Is polygamy wrong? 「ジョーンズはよい人か？」Is Jones a good man? 等の〈問い〉によって表わされる問題が扱われるものとされ、ヘアーはこの領域に関する名称として、「道徳」morals の語をあてている (EMC, p. 39)。これに対し、第二の領域では、「モハメッドは、重婚の正しさ又は誤りに関し、実際には、どう考えていたのか？」What did Mohammed in fact think about the rightness or wrongness of polygamy? といった〈問い〉に代表される問題が扱われるものとされ、彼はこの領域を「記述倫理学」descriptive ethics と名づけている (EMC, p. 39)。さらに第三の領域では、「モハメッドが、重婚は誤りではないと言ったとき、彼は何を言っていたのか？」When Mohammed said that polygamy is not wrong, what was he saying? といった〈問い〉に代表される問題が扱われるものとされ、この領域に対しヘアーは、「本来の倫理学」ethics proper という名称を与えている (EMC, pp. 39 f.)。

勿論、ヘアーはこれによって、広義での「倫理学」という用語がこれら三つの領域全てに係わるものであるということを否定するものではないが (cf. EMC, p. 40)、彼の提起する用語法に従えば、「本来の倫理学」において探求されるべき問題は、上記の如く、言わば「道徳的言語使用に基づき成立する意味」についての問題であるとされ、実質的な道徳問題の解決及び道徳的事象の事実に関する記述的探求は、「倫理学」のなすべき本来の課題ではないと主張するのである (EMC, p. 40)。

こうした彼の主張は、前期ヘアー倫理学の特徴を極めて明瞭に表わすものであり、また既に、前期の立場における根本的な問題点の所在を示唆するも

のであるとも思われるが、これらの点に関する批判的考察へと向かう前に、ここではまず、彼自身の言表に従い、こうして分類された三つの領域に関する彼の特性認識をさらに詳しく検討してみることにしたい。

上述の如くヘアーは、広義での「倫理学」に係わる三つの領域に対し、それぞれ「道徳」、「記述倫理学」、「本来の倫理学」とした名称を与えているが、さらに彼は、各々の領域において探求の具体的対象となるべき言明 statements の基本的特性に基づき、以下のように、これらの領域をより明確に特徴づけることが可能であるとしている。第一に、「道徳」の領域において探求の対象となるべき言明は、次のような観点から確定可能であるとされる。

もし〔ある人物が、特定の言明を〕なすことにより、一定の道徳的見解又は立場に与^レてい^レる committing ならば、〔彼は〕道徳的言明 moral statement をなしていることになる。もしそうではないならば、(即ち、もし彼が、単に、彼又は他の人々によって〔実際に〕支持されているか、又は支持されているかも知れない道徳的見解に関し、第三者的な仕方で述べているだけであるなら、それは、記述倫理学的 descriptive ethical 言明であるか、又は〔本来の〕倫理学的 ethical 言明である。(EMC, p. 40)

従って「道徳」の領域は、一定の道徳的見解又は立場に基づく言明の構成を目指す領域であると言え、このことから、さらにこの領域では、そうした一定の道徳的見解又は立場の確立ないし基礎づけが目指されることになると考えられる。

次に「記述倫理学」において探求の対象となるべき言明と、「本来の倫理学」において探求の対象となるべき言明は、以下のような観点から確定可能であるとされる。

もしその言明の真理値が、人々の実際に支持している道徳的見解が如何なるものであるか〔ということ〕に基づき決定されるものであるなら、それは、記述倫理的言明である。しかし、もしその真理値が、ただ、特定の語 words により意味されていることは何であるのか、又は人々が特定の道徳的見解を表明したとき、何を彼らは言おうとしているのか〔ということ〕のみに基づき〔決定されるものであるとすれば〕、それは、〔本来の〕倫理的言明である。(EMC, p. 40)

それ故、「記述倫理学」の領域では、道徳的事象の事実に関する言明の構成、即ち道徳的事実の記述化が課題となり、「本来の倫理学」では、純粹に言語現象として対象化されたものとしての道徳語ないし道徳的言明によって表わされる〈意味〉を開示することが課題になると言えよう。

ヘアーに従えば、しかし、これまでの哲学においてなされてきた倫理的議論の多くは、これら各領域間の差異を明確に把握してはおらず、また、そのことが、哲学の倫理的議論を不透明なものにしている主要な要因の一つともなっているとされる (cf. EMC, pp. 40-42)。こうした混乱の見られる一つの典型例として、彼は、古代ギリシアの快樂主義者エウドクソス (Eudoxus) によるものとして伝えられる次のような言葉を挙げている。

誰もが快は善であると考えているのだから、快は善であるに違いない。
(EMC, p. 41)

ヘアーも指摘するように、ここでは明らかに、ある特定の集団において認められる道徳的事実の記述と、ある実質的道徳原理の基礎づけが混同されていると言えよう。即ちここでは、実質的道徳原理の基礎づけという「道徳」の領域において探求されべき課題と、道徳的事実の記述という「記述倫理学」の領域において遂行されべき課題とが明確に区別されてはいないために、あ

る特定の集団における道德的事象に関しての記述的事実が、特定の実質的道德原理における無制約的妥当性の根拠をなすものと見做されてしまっているのである。しかし、改めて述べるまでもなく、特定の实質的道德原理が、ある特定の集団に受け入れられているという記述的事実をもって、当該の原理における無制約的妥当性の根拠とすることはできないということは明白である。またこのことは同時に、「記述倫理学」の与える知見をもって、実質的道德問題に解決をもたらすことはできないということを示唆するものであるとも言えよう。

ヘアーはさらに、次のような事例を挙げ、「記述倫理学」における課題と、「本来の倫理学」における課題との混同可能性に関し言及している。

例えば、〔イギリスの郵便ポストは赤い〕ということに異議を唱える人に対し、イギリスの郵便ポストは赤いということ、次のような仕方で証明することが可能であると思われるかも知れない。〔即ち〕我々は、まず、〔様々な〕物〔に関し、それら〕が、ある特定の識別可能な性質をもっているなら、誰もが、それらは赤いと言ひ、そしてそれらの物がこの性質をもっていないなら、それらは赤くないと言うことを確定し、このことから、〈赤い〉red とは〈この性質をもっていること〉having this quality を意味しているという結論を下すのである。次に我々は、我々の異論者に対し、イギリスの郵便ポストがこれと同様の性質をもっているということを観察するよう求めるのである。かくして、我々は、〈この性質をもっていること〉が正に〈赤い〉が意味することであるということを既に確定しているが故に、彼は、〔イギリスの〕郵便ポストが赤いということ、これ以上否定することはできなく〔なるのである〕。(EMC, p. 41 f.)

しかしながら、ヘアーによれば、道德語の〈意味〉を開示するという「本

米の倫理学」における課題を遂行するために、ここに提起されているような方法を用いることはできないとされる (EMC, p. 42)。何故なら彼の主張によれば、例えば「道徳的改革者」moral reformer の事例において顕著に見られる如く、道徳語については、特定の集団において一般に支持されているものとは異なった使用規準を提唱することが常に可能であるにも拘わらず、当該の語に関する基本的な〈意味〉了解においては、新・旧両者間に差異の認められないという状況が想定可能であるとされるからである (EMC, p. 42)。ヘアーは、道徳語の〈意味〉におけるこうした特殊性に関し、「奴隷制は正しい」Slavery is right. という言明を取り上げ、その解説を試みている。即ち、彼の解釈によれば、「奴隷制は正しい」としている特定の集団において、一人の「道徳的改革者」が現れ、「奴隷制は正しくない」Slavery is not right. と主張することは常に可能であるが、この場合にも、両者間の道徳的議論が有意味に展開し得るためには、「正しい」という道徳語の基本的な〈意味〉に関する了解は一致するものでなければならないという条件が満たされている必要があるとされる (cf. EMC, p. 42)。言い換えるなら、「正しい」という道徳語の基本的な〈意味〉に関する両者の了解が一致するものではないならば、そもそも両者間において、「何を正しいとするか？」という問いをめぐる論争自体が成立不可能になるだろうと言うのである。それ故、彼の見解に従えば、道徳語に関しては、「特定の集団においてその語が如何に使用されているか」という記述的事実をもって、その語の〈意味〉を確定することはできず、ここには新たな視点に基づく〈意味〉の探求方法が求められることになり、こうした課題を担うものこそ、「本来の倫理学」に他ならないとされるのである (EMC, p. 42)。

しかしながら、ヘアーのこうした主張には、必ずしも正確ではない幾つかの点が含まれていると言わなければならない。彼の解釈では、記述的探求が、あたかも「赤い」のような性質記述語の〈意味〉を開示する方法としては有効であるが、「正しい」のような価値語（道徳語）の〈意味〉を開示する方

法としては有効性をもたないものであるかの如く見做されている。しかし、「赤い」という語が、特定の使用状況の下では、例えば「イギリスの郵便ポストの色」を意味するのと同様に、「正しい」という語が、特定の使用状況の下では、「奴隷制の価値」を意味するということも事実であり、こうした〈意味〉の開示にとって記述的探求が有効であるということは、双方のケースにおいて否定し得るものではないと言えよう。言い換えるなら、記述的探求の本質は、「観察に基づく記述」という点にあり、従って、探求の対象となるべき言語使用が観察可能なものとして与えられるものである限り、この方法に基づく〈意味〉の開示は、何れの語に関しても可能なのである。しかしこのことは、言語使用によって実現される〈意味〉の全てが、記述的探求によって開示され得るということを示唆するものではない。例えば、「赤い」という語を取り上げてみても、この語の〈意味〉に関し、ヘアーは、「特定の識別可能な性質をもつこと」であるとしているが(EMC, p. 42)、「赤い」という語に認められるこうした〈意味〉の側面は、この語の使用に関する観察から直接的に記述され得るものではなく、この語の使用に関する観察に基づいた記述から帰納的に推理されたものに他ならない。それ故、「赤い」のような性質記述語に関しても、こうした形式的な〈意味〉の側面は、記述的探求のみによっては決して開示され得るものではないのである。同様に、「正しい」のような価値語(道德語)に関しても、特定の使用状況には限定されないこの語の〈意味〉の側面は、記述的探求によって開示され得るものではなく、この点の指摘に関しては、ヘアーの解釈に誤りはないものと考えられる。恐らくヘアーは、特に〈道德語〉と呼ばれ得るものに関し、こうした特定の使用状況には限定されない〈意味〉の側面を分析的観点から探求することこそ、倫理学の担うべき本来の課題であると考え、このような探求に対し、「本来の倫理学」という名称を与えようとしているのであろう。しかしながら、こうした分析的探求を目的とする「本来の倫理学」においても、分析の具体的対象となり得るものが与えられていなければ、その探求は一步

たりとも進展し得ず、また「本来の倫理学」において目指されているものが、道徳的言語使用の事実に即した〈意味〉の開示であるとすれば、分析の具体的対象は、道徳的言語使用の事実に関する観察に基づいた記述として与えられなければならないものと考えられる。従って、このような観点から言えば、記述的探求は、「本来の倫理学」にとっても、分析的探求の具体的対象を確定する基礎過程において遂行されべき不可避の課題であると見做されなければならないものとなろう。換言すれば、記述的探求は、「赤い」のような性質記述語に関しても、「正しい」のような価値語（道徳語）に関しても、それらが特定の使用状況において表わす〈実質的意味〉を開示するためには有効に機能し得るが、特定の使用状況には限定されないそれらの〈形式的意味〉を開示するためには、他の探求手段が求められなければならないということに他ならない。ただし、〈形式的意味〉の開示にあたっても、上述の如く、そこにはまず探求の具体的対象が与えられなければならず、そうした対象の確定段階において、記述的探求は、不可避の課題として遂行されなければならないという点を忘れてはならない。ヘアーによる前述の解釈では、あたかも記述的探求が、性質記述語の〈意味〉を開示するためには有効に機能し得るのに対し、価値語（道徳語）の〈意味〉を開示するためには有効に機能し得ないかの如くに述べられているが、こうした解釈が極めて不正確なものであるということは、今や明白であろう。

ところで、ヘアーは同稿において、彼の提唱する「本来の倫理学」と「道徳」との関係についても触れている。以下ではさらに、この点に関する彼の見解を検討してみることとしたい。「本来の倫理学」と「道徳」との関係に関する彼の基本的見解は、次の一文のうちによく示されていると言えよう。

たとえ我々が、道徳語の意味というものを明らかにし得たとしても、このことから、我々は、道徳問題 moral questions に関する実質的結論 conclusions of substance へと直進することはできない。(EMC, p. 42)

ここに言及されている「道德語の意味」とは、言うまでもなく、特定の使用状況には限定されない道德語の〈形式的意味〉を指すものに他ならず、また彼の提唱する「本来の倫理学」とは、こうした〈形式的意味〉の開示を本質的課題とするものであるところから、この一文は、「道德語の〈形式的意味〉に関する探求を本質的課題とするところの〈本来の倫理学〉によってもたらされる知見のみをもってしては、実質的道德問題を解決することはできない」という、「本来の倫理学」と「道德」との関係に関する彼の基本的見解を端的なかたちで述べたものであると見ることができよう。そして、彼によれば、このことは、ある行為に関し、それが遂行されるべき状況とその結果に関する記述的諸事実についての認識においては一致していながら、その道德判断においては一致しない二人の人物が、両者の道德判断における妥当性に関し議論を戦わせているような事例を取り上げてみるならば、明白であるとされる (EMC, pp. 42 f.)。換言すれば、ある特定の行為に関し、一方の人物はそれを「正しい」とし、他方の人物はそれを「正しくない」としている両者間において、互いの判断に関する妥当性についての議論が戦わされているような状況を考えるなら、「本来の倫理学」によってもたらされる知見がこのような事例において果たし得る役割は、自ずから明瞭であろうと言うのである。即ち、ヘアーの解釈に従えば、このとき、両者の間では、当該の行為に関する道德判断についての議論が有意味に展開されているという事実から、「正しい」という道德語の〈形式的意味〉に関する両者の理解は、一致していると見做すことが可能であるとされる。従って、両者間の差異は、〈道德の実質的意味〉に関する了解の差異に基づくものであるということになる (cf. EMC, p. 43)。しかし、彼の提唱する「本来の倫理学」は、上述の如く、道德語の〈形式的意味〉に関する分析的探求を本質的課題とするものであるが故に、こうした探求によってもたらされる知見が、〈道德の実質的意味〉に関する了解の差異に基づいた議論に対し実質的な影響を及ぼすということは、その議論が道德語の〈形式的意味〉に関する了解においては差異

を含まないものである限り、もたらされる知見の性格上、決してあり得ないというのである。言い換えるなら、ここで展開されている議論は、道德語に認められる〈形式的意味〉の了解をめぐるものではなく、特定の事象に関する道德判断に際し、その帰結根拠として機能すべき実質的道德原理の差異に起因するものであるが故に、彼の提唱する「本来の倫理学」によってもたらされるところの道德語の〈形式的意味〉に関する知見が、このような実質的道德原理の差異に基づく議論に対し、何らかの実効力をもつということは、そもそも論理的に不可能であるということなのである。従って、「実質的道德問題」との関連において、ヘアーの提唱する「本来の倫理学」がなし得ることは、単に、道德的言語使用の論理的矛盾を指摘することのみに止まり、当の問題に関する考察において言語使用上の矛盾が認められない限り、ここに「本来の倫理学」と呼ばれるところのものは、何もし得ないという極めて消極的な結論へと到らざるを得ないのである。

以上、本稿において筆者は、前期ヘアー倫理学における〈道德〉の概念規定を明らかにするための一つの試みとして、1960年に発表された彼の小論文「倫理学」を取り上げ、その論述内容を検討してきたが、これまでの考察が示す通り、この論文には、彼の用語法に言う「記述倫理学」及び「本来の倫理学」との関連において〈道德〉概念に関する若干の言及は見られるものの、『道德の言語』と同様、この論文においても、〈道德〉に関する明確な概念規定は与えられておらず、従ってここで明らかに指摘し得ることは、「彼が〈道德〉概念を如何なるものとして理解していたかということは、依然として不明である」ということ以外にはない。ただ、この論文に認められる彼の〈道德〉概念に関する若干の言及から推測し得ることをここに敢えて述べるなら、彼は、〈道德〉概念に関する我々の極めて漠然とした日常的了解を、全く無批判に前提としたまま論を進めているかのように見受けられるということのみである。しかし、改めて述べるまでもなく、このような論述態度が、倫理学を含む全ての哲学的探求において、決して許され得るものではないと

いうことは明らかである。また、彼自身が提唱する「本来の倫理学」における基本理念に即しても、こうした論述態度は、決して受け入れられ得るものではないとも考えられる。上述の如く、彼の提唱する「本来の倫理学」は、特定の使用状況には限定されない道德語の〈形式的意味〉に関する分析的探求を本質的課題とするものであり、こうした基本理念に即して言うならば、彼の提唱する「本来の倫理学」は、「道德」という語に関しても、特定の使用状況には限定されないこの語の〈形式的意味〉を分析の対象としなければならないという課題を必然的に有するものであると言えよう。従って、このような観点から見ると、「道德」という語それ自体の〈形式的意味〉を分析することにより、少なくとも形式的視点に基づく〈道德〉の概念規定を明示することは、彼の提唱する「本来の倫理学」にとって、正にその基本理念から由来する根本課題の一つであると言っても過言ではないのである。それにもかかわらず、彼は、こうした課題に取り組むことはおろか、むしろこれを課題として提起すること自体から意識的に逃避しているかのようでさえあり、こうした彼の論述態度は、それ故、上述の如く、彼自身が提起する理論に要求される論理的整合性の観点から見ても、厳しく批判されて然るべきものであると言わなければならない。

さらに、彼の提唱する「本来の倫理学」という用語法についても、筆者は、これに異論を呈せざるを得ない。既述の如く、「実質的道德問題」との関連において彼の提唱する倫理学的理論のなし得ることは、言わば道德的言語使用に基づく論証の論理的基盤を確立するに止まり、そうした論証に実質的指針を与えることは、その権能の域を越えるものであるとされている。なるほど、道德的論証の論理的基盤を確立することは、論理的・理性的探求であるべき倫理学における不可避の課題であるとは言い得よう。しかし、「実質的道德問題」に関する論証に、何らの実質的な指針も与え得ない理論をして、果たしてこれを「本来の倫理学」と呼び得るだろうか。筆者はこれに「否」と答えざるを得ない。むしろ、このような倫理学的理論は、論理学が哲学の

基礎をなす如く、倫理学の基礎を形成するものに他ならず、「本来の倫理学」とは、このような基礎理論に基づく知見と共に、「実質的道德問題」の解決に資すべき明確な実質的指針をも与え得る倫理学理論の体系をこそ呼ぶべきものではないだろうか。この意味で、筆者は、ヘアーの提唱する倫理学的理論には、「基礎倫理学」elementary ethics の名称こそ相応しいと考える。また、彼の提唱する理論は、正に「基礎倫理学」としての性格を有するものであるが故にこそ、そこには、〈道德〉に関する明確な概念規定が求められることになるのであるとも言い得よう。

* 本稿は、SHIBASAKI 1994 第1部第3章第2節における考察を基に、標記の論題に関し再論を試みたものである。

** 表記に関する注意：引用文中の〔 〕は、筆者による補足である。原文の ‘ ’ は、〈 〉とし、“ ” は「 」とした。また、原文のイタリックに関して、アルファベットの場合はそのままアルファベットとし、邦語訳の場合には傍点によってこれを表した。さらに、本文中の「 」及び〈 〉は、特に注記のない限り、文意を整えるために筆者が任意に用いた記号である。本文中、引用語句を示すために「 」を用いた場合は、そのつど注記を付した。

*** 略記

EMC: Hare, R. M., *Essays on the Moral Concepts*, University of California Press, Berkeley (California) 1972.

SHIBASAKI, F. (1994) : *Formalismus und Fanatismus: Eine Untersuchung zur Moralphilosophie R. M. Hares*, Verlag Dr. Kovač; Hamburg.

《注》

- 1) この項目に関するヘアーの叙述は、後に彼の論文集 *Essays on the Moral Concepts* にも収められており (EMC, pp. 39-54), またその内容に変更も認められないところから、参照の便を図るため、この叙述に関する本稿の言及は、全てこの論文集に収められているものに依ることとする。

(しばさき・ふみかず 政治経済学部教授)